

# 「イエス・キリストの誕生」 (マタイ1:18-25)

挽地茂男

2019.12.15 日本基督教団千歳丘教会朝礼拝

アドベント・キャドルが3本点  
りました。教会の暦ではクリスマ  
スの前日(24日)までがアドベン  
トということになります。アドベン  
トという言葉はもともとラテン  
語の〈アドベントゥス〉という言  
葉で、基本的に「来ること」「到来」  
「来臨」を意味する言葉ですが、  
言葉のニュアンスとして、何かが  
「不意を突いて突然現れる」とい  
う意味合いがあります。つまりこの  
アドベントという言葉には「思い  
がけないものの到来」という意味  
があるのです。そこから「思いが  
けないものとの出会い・発見」を  
も含む〈アドヴェンチャー  
(adventure)・冒険〉という言葉  
の語源でもあるのです。人間が経  
験やデータや計算に基づいて推測



できる未来、この未来をラテン語  
では英語の future にあたる〈フト  
ールム〉という言葉をあてます。  
この未来とは違う、つまり予測可能  
なものとは違う、「思いがけないも  
のの到来」をわたしたちが待つ、  
「思いがけないものとの出会い」  
を心を開いて待つ、それがアドベ  
ントに込められている「待つ」こと  
の意味なのです。

今日の物語は、  
一組の婚約者同士に  
とって、まったく「思  
いがけないものの到  
来」と言うに相応し  
い出来事を伝えてい  
ます。その婚約者た  
ちの名はヨセフとマリア。19節で  
ヨセフが「夫」、20節でマリア  
が「妻」と呼ばれているように、  
ふたりの婚約は、すでに合法的に  
「夫」と「妻」と見なされる人間  
どうしを縛る(拘束する)契約で  
した。ですから、この契約に対す  
る不誠実は姦淫と見なされ、死な  
いしは離婚によって決着をつける  
ことが可能だったのです(1:19)。  
婚約者のマリアはすでに妊娠して  
いました。モーセの律法はこのよ  
うな場合には死刑を要求していま





す（申22:23-27）。読者であるわたしたちは、18節で、この妊娠が聖霊によるものであることを知らされ

ます。ヨセフもすでにマリアの妊娠を知っていますが、それが神様からのもの〔神的な起源を持つもの〕であることを知らないのです。ヨセフは20節ではじめて、天使からそれを知らされます。「思いもかけない知らせ」でした。聖書はこう書いています。彼「**ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心し**」ていた。ヨセフに対する「正しい人」という呼び方は、ヨセフの性格について語られている最初にして唯一の評価です。この「正しい」を意味する〈ディカイオス〉（*δίκαιος*）という言葉は、マタイの福音書（神学／思想）においてはキーワードなのです。〈ディカイオス〉であることは、すなわち「正しく生きる」ということは、律法——つまり明らかにされた神

の意志に——従って生きることを意味しています。しかしヨセフは、〈ディカイオス〉である人物に予想される行動とは正反対に、律法の文字によって行動せず、マリアに対する思いやりから静かに彼女を去らせよう（*ἀπολύσαι*）と決心したのでした。許嫁の妊娠を知らされたとき、マリアを除いて一番驚いたのはヨセフだったでしょう。彼は、それを表沙汰にして、マリアを責め立て、責任の所在を追求して一騒ぎ起こしても誰もヨセフを咎めなかったでしょう。おそらくヨセフはマリアを愛していたのです。少なくとも彼女を大切には思っていたのです。彼には、どれほど頭をひねって考えてみても、心の隅で「マリアはそんな娘ではない」と繰り返してみても、やはり、マリアの言うことを100パーセント信じることは、不可能でした。しかし不可能であったとしても、彼には、マリアを不貞の女として人目に晒し、不貞の女として人々の軽蔑の的にすることはできなかったのです。彼はこの「**ことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心し**」と言われておりです。ここからマタイ

の言う「正しさ」が——先週も言いましたように——律法の言葉（律法の文言）を守る・墨守するというレベルを超えていることが分かります。マタイによる福音書では、「正しさ」は「愛」を抜きにした行動の完璧さ(完全性)や倫理性の高さとは考えられていないのです。反対に「正しさ」は「愛」を具体的に表した表現としてとらえられていきます。ここでのヨセフの「正しさ」はもはや古い「正しさ」ではなく、新しい「正しさ」なのです。「正しさ」とは、「愛」の行動形なのです。だからパウロはこう言うのです。「[ロマ13:8](#) 互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがあってはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです。13:9 「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」、そのほかどんな掟があっても、「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉に要約されます。13:10 愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするものです。」

「思いがけないメッセージ」は夢の中で告げられました。夢の中です。もうお気づきでしょうか。

ヨセフは旧約聖書のヤコブ——後にイスラエルと名前を変えるそのヤコブ——の12人の息子(12族長)の一人であったヨセフと重ね合わせられているのです。あの夢の力で、エジプトの宰相(大臣)にまで登り詰めたヨセフと二重



写しで描写されているのです。先週は、今日の箇所の一つ前の箇所にあたるマタイの系図を学びました。マタイは、かなり大胆に系図の意味を追究していることを学びました。マタイは歴史を圧縮して、歴史の意味を明らかにしようとしてきました。聖書はマタイのそのような人間的意図を生かして神について語りつつ、究極において神が人に語りかける「神と人間の書」なのです。マタイの系図とルカの系図を比べてみるとそのことがよく分かります。ルカでは、「ヨセフはエリの子」(3:23)となってい



るのに対して、マタイでは「ヨセフはヤコブの子」(1:16) になっているのです。父親が違うのです。どちらが正しいのでしょうかという、歴史的データの問題ではないのです。

歴史の意味を問題にしているのです。もうお分かり

になっていると思います。歴史が事実を追究してくる、つまり実証的な歴史学が起こってくるのは、19世紀後半です。近代なのです。古代においてまずは、歴史は意味なのです。

旧約のヨセフ物語はユダヤ人にとっても愛された、今も愛されている物語です。ユダヤ人だけでなく聖書を読む人であれば誰でも好きな物語、トマス・マンのような文学者が『ヨセフ物語』というよう



改変!! But ルカの系図はマリアの系図ではない, see Lk3:23-38

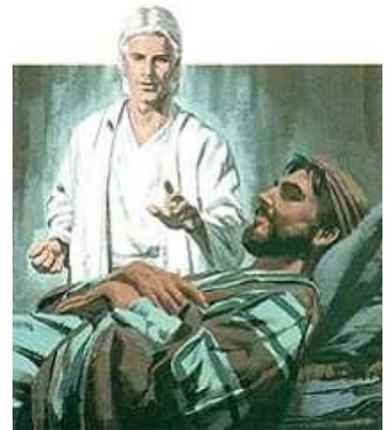
な長編小説に仕立てたくなるほど魅力的な物語です。ヤコブの末の息子として生まれた(この後ベニヤミンが生まれますが、その前)ヨセフは、父親の寵愛を受けます。というよりむしろ、兄たちから見れば、父親の偏愛(えこひいき)の対象となりました。また不思議な夢を見る能力(予知夢)や人の夢を解き明かす能力を持っていました。そのヨセフが夢の中で、兄たちが自分に仕える僕となるという夢を見ます。黙っていればいいものを、吹聴してしまった彼は、10人の兄たちの恨みをかい、ヨセフに対する父ヤコブの偏愛(えこひいき)



に対する兄たちの嫉妬から、毘に掛けられて、ついにエジプトに奴隷として売られてしまいます。しかしヨセフは夢の力で、さまざまな危機を乗り越えて、最後はエジプトの宰相(大臣)にまで登り詰めます。そしてやがて、飢饉によってカナンからエジプトに食料を求めてやって来たヤコブの一族との再会を果たし、長年の兄たちに対する怨念(恩讐)を超えて和解

を果たすという、いわゆるイスラエル12部族の「エジプト下り」の発端にヨセフの物語があるのです。マタイによる福音書を1章を終えて2章に進んでいくと、ヨセフの一家とつまり妻マリアと幼子イエスの一家が「エジプトに下る」物語が出てまいります。さらにエジプトの王ファラオがヘブライ人の数が増えて脅威となるのを恐れて男児殺害を命じたのと同じように、ヘロデ王も東方の学者たちが伝えた新しい王(イエス)の誕生の報告(2:1-12)を危険視して、主イエスの誕生と同時期に生まれた男児の殺害を命じます(2:16-18)。そしてついに、ヘロデが亡くなると、エジプトに逃げていたイエスの一家が、エジプトを出て(つまり出エジプトして、2:19-23)イスラエルに、ガリラヤのナザレに帰ってまいります。このように旧約聖書と対応していること、イエスの系図を〈ゲネシス〉(γένεσις 創世記とも訳せる言葉)と呼ぶなど、特に、モーセ五書との対応が多いので、紀元2世紀には、マタイによる福音書は、新約時代に書かれた「新しいモーセ五書」だとする解釈も出てまいります。

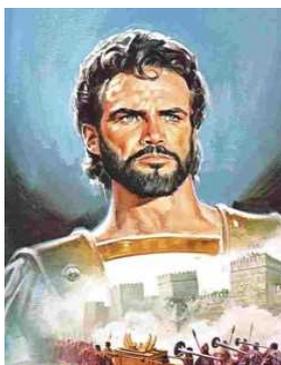
しかしモーセ五書といくつかの点で似ているということが、大事なではありません。大事なのは、旧約のヨセフと同じように、新約のヨセフも世間一般の常識や、合理的にのみ物事を見るのではなく—あるいは見るだけでなく—神様の導きの多様性に開かれていることなのです。人生には乗り越えなければならぬ「恐れ」がわたしたちを立ちすくませてしまうことがあります。キリスト者にとって、それを乗り越える力は信仰による以外ありません。神様は危険すれすれの所をも、信じる者を導いてくださることを確信することなのです。そのとき「思いもよらないもの」との出会いがアドヴェンチャーとなるのです。



そのアドヴェンチャーに導くように天使が言います。「恐れるな」(v. 20)。神様は、天使を送って夢でヨセフに語りかけます。「恐れるな」、天使が発している最初の言葉は、天使が啓示を伝えると

きに使われる典型的な言葉です（創21:17, マタ28:5, ルカ1:13, 30, 2:10, 黙1:17参照）。「恐れるな。」天使はヨセフに語ります。「**ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい**」（Ἰωσήφ υἱὸς Δαβὶδ, μὴ φοβηθῆς παραλαβεῖν Μαριάμ τὴν γυναῖκά σου・v.20a）。天使はマリアの懐妊について説明を与え、すでに為された神の御業を宣言します。「**マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである**」（v.20b）。だから「あなたはその子供を、自分自身の子供として受け入れ、正当なる『ダビデの子』として彼をダビデの家系に養子として迎え入れよ」と言うのです。

続いてこう命じます。「**その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである**」（v.21）。ヨセフに次いでもう一人の重要人物の名前です。いえ、最重要人物の名前です。「イエス」という名前です。しかし実は、イエスという名前は、当時としては、珍しい名前ではありませんでした。一世紀のユダヤ社会には一般的な名前



した〔コロ4:11「ユストと呼ばれるイエスも、よろしくと言っています。…」参照〕。紀元一世紀にユダヤの歴史を書いたヨセフスという人の本の中にはイエスという名前を持つ人物が、20人登場します。それほど、このイエスという名前は一般的な名前だったので、救い主は普通の人間の名前を付けられているのです。これは、救い主をこの世界の人間から遠い存在にすることなく、むしろ人間に近い存在として、人間に結びつけるしるしなのです。しかしこのイエスという名前を、マタイは非常に大切に考えています。イエスというギリシア語の名前はヘブライ語ではヨシユアに当たります。[[ギ]イエスースは[へ]イエホシュアの短縮形イエーシュアを指すマタイのギリシア語。マタイの使う七十人訳ギリシア語旧約聖書にはヨシュアがイエス(イエースース)と訳されている〕。彼はこの名前を、自分が使っている資料に80回も挿入しているのです。イエスはヘブライ語では、ヨシュアにあたりと申しました。その名前の意味は



「主(ヤハウエ)は救い」という意味です。救いはイエス(ヨシュア)によってもたらされるのです。

そしてヨシュアと言えば、モーセの後継者であります(民27:12-23, 申32:7-23, ヨシュ1:5-9)。モーセは約束の地を目の前にして、イスラエルの民と共に約束の地に入ることができませんでした。その約束の地にイスラエルの民を導いたのは、モーセの跡を継いだヨシュアだったのです。ヨシュア(イエス)が約束の地に導くのです。実はマタイの福音書において、主イエスがモーセの役割を継承し完成するという事実は、マタイの物語の重要なテーマなのです。例えば、山上の説教でこう言われます。5章17節。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。」

加えてマタイの属していた教会は、ユダヤ(パレスチナ)で誕生して[ユダヤ戦争が理由であったのか]パレスチナから外地に移動を余儀なくされた教会だと言われています。おそらくマタイの属していた教会だけではないでしょう。紀元66から

始まり70年にエルサレム神殿の破壊によって終戦を迎えるユダヤ戦争の際に、パレスチナにあった最初期の教会(共同体)は、パレスチナの外に活路を見いだすべく、新しい土地に向けて旅立つことを余儀なくされました。マタイがイエスという名を80回も挿入しているのは、イエス(ヨシュア)という名前を通して、新しい地に向かう人々の勇気を鼓舞したかったからかもしれません。

旧約聖書のヨシュア記を読むと、特徴的な表現が繰り返し繰り返し出てきます。「恐れるな」をひっくりかえして肯定的に表現した「強く、雄々しくあれ」という言葉と「私[神]はあなたと共にいる」という言葉が繰り返されるのです。例えば、ヨシュア記1章6節。「ヨシ1:6 強く、雄々しくあれ。あなたは、わたしが先祖たちに与えると誓った土地を、この民に継がせる者である。」ヨシュアに対してカナン(つ



まりパレスチナ)の土地を与えるという約束を確認し、さらに7節に次のように続きます。「ヨシ1:7 ただ、強く、大いに雄々しくあって、わたしの僕モーセが命じた律法をすべて忠実に守り、右にも左にもそれではならない。そうすれば、あなたはどこに行っても成功する。」さらに9節に進むと、「恐れるな」つまり「強く、雄々しくあれ」という表現と「あなたと共にいる」が結びつきます。「ヨシ1:9 わたしはあなたに命じたではないか。強く、また雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない」(口語訳)。

ヨシュア記で繰り返される「恐れるな(強く、雄々しくあれ)」「私[神]はあなたと共にいる」という反復される表現は、マタイにとって重要なテーマになります。この表現は、旧約聖書のヨシュア(イエス)をその新約聖書のヨシュアつまりイエスに結びつけるのです。21-23節。「1:21 マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」

1:22 このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。1:23 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。」

ここでこの結びつきに一役買っているのがイザヤの預言です。「1:23 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。」これはイザヤ書7章14節の引用です。「イム」ヘブライ語で「共に」、「マヌ」「わたしたち」、「エル」「神」、「インマヌエル」つまり「神はわたしたちと共におられる。」旧約のヨシュア記のテーマが、預言者を介して新約のイエスに結びつきます。



旧約の預言者の言葉が、主イエスの誕生物語には集中していま

す。律法だけでなく、律法と預言者を継ぐ者として主イエスは描かれます。そしてこのような旧約預言を使ったヨセフに対する天使の語りかけは、読者への直接的な語りかけとなります。「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」だから「**恐れてはならない。おののいてはならない**」のです。「**強くあれ。雄々しくあれ。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるから**」なのです（新改訳改訂第3版、ヨシ1:9）。アドヴェンチャーは恐れる者のものではありません。恐れる者は計算するしかありません。アドヴェンチャーの与える新しい出会いや経験は、静かな決意をもって踏み出す者のものなのです。

もう一度ヨセフの行動（服従）を見ておきましょう。24-25節。「**1:24 ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、1:25 男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そ**



して、その子をイエスと名付けた。」ヨセフは一言も言葉を発しません——彼は背中で語っています。信仰は単なる言葉に表れるのではなくて、行動に表れるのです。ヨセフの行動の特徴は、神の命令への従順です。彼は天使の言葉に従って、「イエス」と命名します。「イエス」(v.21)と名付けることによって、彼は実際上イエスをダビデの家系の中に受け入れるのです。人間に与えられる救いは、主イエスを通して与えられたのでした。しかし同時にヨセフの従順を通してもやってきたのです。



新しい1週間も、神の御前に静かに思うとき「静思の時」を大切にしつつ、1日1日を歩んでまいりましょう。

- 2016.12.18 日本基督教団千歳丘教会朝礼拝
- 2017.12.3 日本基督教団千歳丘教会朝礼拝
- 2019.12.15 日本基督教団千歳丘教会朝礼拝

1:18 イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。

1:19 夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。

1:20 このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。

1:21 マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」

1:22 このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

1:23 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

1:24 ヨセフは眠りから覚めると、

主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、

1:25 男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。

1·18 Τοῦ δὲ Ἰησοῦ Χριστοῦ ἡ γένεσις οὕτως ἦν. μνηστευθείσης τῆς μητρὸς αὐτοῦ Μαρίας τῷ Ἰωσήφ, πρὶν ἢ συνελθεῖν αὐτοὺς εὐρέθη ἐν γαστρὶ ἔχουσα ἐκ πνεύματος ἁγίου.

1·19 Ἰωσήφ δὲ ὁ ἀνὴρ αὐτῆς, δίκαιος ὢν καὶ μὴ θέλων αὐτὴν δειγματίσαι, ἐβουλήθη λάθρα ἀπολύσαι αὐτήν.

1·20 ταῦτα δὲ αὐτοῦ ἐνθυμηθέντος ἰδοὺ ἄγγελος κυρίου κατ' ὄναρ ἐφάνη αὐτῷ λέγων, Ἰωσήφ υἱὸς Δαβὶδ, μὴ φοβηθῆς παραλαβεῖν Μαριάμ τὴν γυναῖκά σου· τὸ γὰρ ἐν αὐτῇ γεννηθὲν ἐκ πνεύματος ἁγίου.

1·21 τέξεται δὲ υἱόν, καὶ καλέσεις τὸ ὄνομα αὐτοῦ Ἰησοῦν· αὐτὸς γὰρ σώσει τὸν λαὸν αὐτοῦ ἀπὸ τῶν ἁμαρτιῶν αὐτῶν.

1·22 Τοῦτο δὲ ὅλον γέγονεν ἵνα πληρωθῆ τὸ ῥηθὲν ὑπὸ κυρίου διὰ τοῦ προφήτου λέγοντος,

1·23 Ἴδοὺ ἡ παρθένος ἐν γαστρὶ ἔξει καὶ τέξεται υἱόν, καὶ καλέσουσιν τὸ ὄνομα αὐτοῦ Ἐμμανουήλ, ὃ ἐστὶν μεθερμηνευόμενον Μεθ' ἡμῶν ὁ θεός.

1·24 ἐγερθεὶς δὲ ὁ Ἰωσήφ ἀπὸ τοῦ ὕπνου ἐποίησεν ὡς προσέταξεν αὐτῷ ὁ ἄγγελος κυρίου καὶ παρέλαβεν τὴν γυναῖκα αὐτοῦ,

1·25 καὶ οὐκ ἐγίνωσκεν αὐτὴν ἕως οὔ